

資料紹介 高松宮家蔵「沙弥蓮愉集」

石 塚 一 雄

沙弥蓮愉、すなわち宇都宮景綱の家集は、従来書陵部蔵御所本「沙弥

蓮愉集」が、唯一の伝本と考えられていた。書陵部蔵御所本 五〇一・三

本叢書第八卷所収は、一八〇首、うち春 一三二首、夏四九首で、夏第四九首目の

上句が列帖の丁替えに当り、それ以下を佚している。今回高松宮家蔵有

栖川宮本を調査した際、たまたまその完本が発見された。

本集は、四季、恋、雑の部立からなり、春 一三一首内、夏九一首、秋一

一三首、冬七七首、恋一〇四首、雑 一八二首内、合計六九八首（他人歌六首）

からなる。その内夏第四九首上句までは、書陵部蔵御所本の書写形式と

全く一致し、御所本が夏部半ばまでの残欠本であることが確認された。

内容は、主として題詠、各種歌会での続歌、探題等の詠作で、年次的に

は、正応三—永仁元年前後と思われる歌が多い。成立事情は不詳である

が、自撰とすればその成立は、集中の詞書、収載歌から推して、出家が

六十歳（永仁二年）頃と思われるので、その後没年の間数年、すなわち

蓮愉晩年の撰であろう。二条為世、京極為兼との贈答、また御子左一門

の為顯（侍従入道明覚）、為氏、為相らと歌交が見られ、鎌倉歌壇として

は平宣時、同貞時らの名がうかがわれる。集中、鈎点（黄・黒）、丸点

（黒・白）の四種の合点が施され、御子左一門の数人に点を乞うたものか

とも考えられる。

本集は、縦二五・三種、横一八・二種の袋綴、表紙は縹色地輪繫ぎ菊

花紋様の鳥の子紙、同左上に黄色地小短冊の題簽に「沙弥蓮愉集」とあ

る。裏表紙は脱落、見返し右中央に、本文と同筆で「藤原景綱蓮愉」と

あり、本文用紙は斐楮交漉の薄様紙、一面八、九行書、歌二行書、詞書

二字下り、墨付枚数九八枚、無奥書で、江戸中期頃の書写である。

書陵部蔵御所本は、桂宮本叢書卷八解題に解説があるが、高松宮本に

比し、書写は古く、江戸初期の書写。各十六丁、二帖からなる列帖装一

冊である。高松宮本に比すると、表見返しの注記はなく、また漢字、仮

名の相異、黄鈎点が朱鈎点になる等の差はあるが、各丁の字数、行数

等、その書写形式は全く等しい。しかし、御所本は、第二帖の第十二

丁末すなわち夏部第四九首上句了るが、尾に三丁見返しを四丁を残している。このよう

な同本の型態は、その後半が伝来間の脱落ではなく、江戸初期に書写し

た際の親本が、既にかかる型態であつたことを示していると思われる。

従つて高松宮本と書陵部本は、同一親本から出た親子本、もしくは兄

弟本の関係ではない。しかしながら両者の親本は、極めて近い関係にあ

つたものであらうと推定される。また高松宮本は、その書写、装幀形式

等から、江戸中期に書写された禁裏本であつて、他の同類の禁裏本と共に、有栖川宮家へ伝来されたいことも、同期書写の有栖川宮本歌書類から推定される。

書陵部本は桂宮本叢書第八巻に翻刻した如く、夏部第四九首の上句、すなわち

千首のうたよみ侍しとき

五月雨にわたりいそかむひろせかはまさらは浪の袖つかぬまに

あめはれてたこのすかゝさてる日にもきならへとこそさなへとるなれ

あさころもぬれてほされぬしつのめか」

に了つている。高松宮本は前述の如く夏部四九首下句以下、秋、冬、恋、雑計五一八首を充足する完本である。この点中世和歌研究上、貴重な資料と思われるので、高松宮家のお許しを得て、ここに翻刻し学界に紹介することとした。しかし、紙数の関係上、また前述したとおり、漢字、仮名の相異を除いて、書陵部本との重複部は大異がないので、夏部第四七首以下を翻刻することとした。

景綱は泰綱の子、母平朝時女、歌人頼綱（蓮生）の孫、嘉禎元^{三二}年生、代々宇都宮掾校、下野宇都宮城主として鎌倉幕府に従い、引付衆、

叙任して、従五位下、下野守、尾張守を歴任し、本集によると、ほぼ六十歳にして薨髪、後蓮愉と号した。永仁六年^{一二}九八五月一日没した。享年六十四歳。一族の時朝、祖父蓮生らと共に宇都宮歌壇の中心歌人として活躍した。続古今集以下八集に三十一首、新和歌集に四十八首の入集をみる。

一、桂宮本叢書（第八巻）所収の部分は除き、若干の重複部はゴチツクで示した。

一、底本は一首二行書であるが、翻刻は、便宜一首一行書とし、上下両句の間は一字空きとした。詞書は底本通り二字下りとし、改行は一字空きを以て示した。

一、底本の丁数は傍注明示した。

一、底本の異体、変体仮名は現行の正字に改めたが、傍に「本ノマ、」の注記ある箇所のみ原形をとどめた。

一、詞書は私見により適宜句読点を附した。

一、底本の歌頭にある合点・集付は、便宜歌の右肩に附した。

沙弥蓮愉集(夏部以下)

千首のうたよみ侍しとき

五月雨にわたりいそかむひろせ河 まさらはなみの袖つかぬまに

雨はれてたこのすか笠てる日にも きならへてこそさなへとるなれ

あさこもぬれてほされぬしつめか²⁶ すそはの田井にさなへとるなり

ふる程は田中のもりにたちよりて あまゝありとてとるさなへかな

ふる雨を門田の水にせきかけて ぬれつゝけふもさなへとるなり

よひなからいかにふけてかあけぬらん ぬるとたになきみしか夜の月

明ぬるか竹のとさしのふしのまも みしかきよはのしのゝめのそら

むら雲の跡ゆく風のけしきまで 夏ともみえぬ山のはの月

松かけのし水に夏をわすれては 殊とそみゆるみしか夜の月

あけゆけはひかりそうすき夏ころも せみのはやまのしのゝめの月

うたゝねもあまり程なき有明に すみはてぬよの月そのこれる²⁷

おほる河となせもみえぬ山かはの ゆふやみふかき夜半のかゝり火

夕やみにたかせのかゝりたきすてゝ 月にうふねのこきかへりつゝ

うかひ舟ゆふやみふかき河よとに さほさしとむるかゝり火のかけ

夏鐘といふ題にて

はつせ山おのへの木の葉しけるらし ふもとにくもる入あひのかね

このまもるしづくに露もをきそへて さこそしけりのもりの下草

下草もさそふかゝらしおほあら木の もりのこの葉のしける比かな

うすきこそかへりてあつくなりにけれ かせのたまらぬせみの羽衣

花にこそやとりはとらめゆふくれの にはもまかきはやまとなてしこ²⁸

山かつのかきほにさけるはなまでも こゝろにかゝるゆふかほの露

ふりはせてかつ／＼風にあめちりて はかよりするゆふたちの空

かきくもりまた一むらそすきぬへき なを跡はれぬ夕たちの雨

風の音はそらにきこえて夕たちの 雲たちのほるみねの杉村

風わたるこなたのそらはくもはれて とをちのかたにのこるゆふたち

をきあまる草葉の露のすゝしさを のこしてする夕たちの空

みわたせはすゝしくなりぬ夕立の 雲にかけるふみねの松原

いしはするたきつはやせにちる玉の おもひくたけてとふはたるかな²⁹

題をさくり侍しに、馬上聞蟬といふ事を

こまとめてしはしすゝまむ鳴せみの こゑするかたのもりのした風

夕されはすゝしくなりぬ夏ころも せみのをかはのせゝのいはなみ

松かけのいはるの水のゆふすゝみ ここには夏もなくなりにけり

いはたゝくたきのあたりの夕すゝみ そてに玉ちる松のしたかせ

夏山のこかけをしけみなをさえて ひむろにとまるたに河の水

ほたるとふあさかのぬまの草の名も かつみるからに殊そちかつく

平宣時朝臣亭にて、続哥侍 しに、螢火透簾といふことを³⁰

殊ちかきのきはのほたるかけみえて すたれすゝしき夜半の手枕

同亭にてよめる

浦つたふなにはのみつのはま風に 消ぬあし火やはたるなるらん
今いくか焔のとなりも蘆かきの まちかき程にとふほたるかな

大納言為氏卿関東へ下侍られし 時、十首哥合時

夏ふかき山井の水に影とめて 焔かせちかくすめる月かな

立よればすゝしくなりぬ松かけの きよなきさをあらふ白浪

夏述懐

おもかけやみる夏ことにかはるらん としをくまるゝ山の井の水^{31ウ}
ふけやらぬ夜半にはまたきふかねとも みそきにちかき焔の初かせ
なるかみのとをちの雲のたえまより とき／＼みゆるよひのいなつま
河上に人もみそきやいそくらん あまたなかるゝあさのゆふして

(二行分余白)

秋

草の葉にあまりてけさの露けきは 風にしられぬ焔やきぬらん
をきそふる露もいつれとわかぬまで ほされぬそてに焔は来にけり
草のはら野もせの露も夜の程に いつしかをきて秋はきにけり^{32ウ}
たまかつら夜半のねさめに音たてゝ おきの葉しるき焔の初かせ

しきたへの枕すゝしく吹そめて ねさめ焔しるところの山かせ

しはしたにおしきあふせを天のかは とわたるほしの夜はふけにけり

題をさくり侍しに、庚申七夕を

こよひなをおもひこそやれあまのかは いもねぬほしのゆきあひの空
たなはたのあふせのなみのたちわかれ そてさへかへるあまの河風

身のほかになかもすてし墨そめの そての色なる焔のゆふくれ
焔かせのをとも枕にきゝなれて ねさめにちかき軒の下萩

焔の夜はねさめの物と音たてゝ ふきもしのはぬ萩のうはかせ^{33ウ}

つく／＼とあけやらぬよにさひしきは 夢よりのちのおきのうはかせ

なをぬらす袖もわか身のからころも 涙にこりぬ焔のゆふくれ

あさあけのまかきの花の色／＼に をきみたれたる焔のしら露

色／＼の焔のももくさをりはへて 花のさかりに野はなりにけり

焔かせに露のよかれもをみなへし おもへは花の名こそおしけれ

さきたはぬ花にかくれてみやきのゝもとあらのはきもみえぬ焔かな

平貞時朝臣三嶋杜十首題よみ 侍し時、草花露

しら露を枝に玉ぬくあき萩は おるへき花の色とたにみす^{34ウ}

庭のおものまさに枝のなひくまで 花さきたはむやとの焔はき^{34ウ}

ちらぬよりはなをうかへて焔はきの しつえをぬらす庭のやり水

打なひきまねくとみれば花すゝき またとにかたへ焔風そふく^{本ノマ、}

をきあまる露もこほれてかるかやの 風にみたれぬゆふくれそなき

うつれとて露をもわけぬ墨染の そてにみたるな萩萩のはな

松をはらふとやまの風のゆふくれは いかにかなしき焔とかはしる

夕くれはこゝろもそらに焔かせの ふきたゝよはすよのうき雲

焔ことにきけとかなしきゆふくれの うけくにあきぬ萩のうはかせ^{35ウ}

おとろかぬ夢よりさきはしらさりつ いまはねられし萩のうはかせ

露もろきおきのうはゝをつたひきて 袖をはらふ焔のゆふかせ

ゆふくれのまかきは山のしたおきに 焔をく露のやとりをそみる

人々続哥侍しに

かきこしの竹のうはゝをたよりにて やとにさきいるあさかほのはな
うつろはぬあしたの露の程たにも さかりわひしきあさかほの花
ははそはらみねのこすゑは明そめて やまもとくらきさほの河霧
またくらきよとのわたりのあさはらけ きりになかるゝ焔の河舟
朝日さすみねのこすゑはあらはれて 霧のそなる焔の山もと一^{36ウ}
明しらむなみちの霧はふきはれて とをしまみゆる焔のうらかせ
したくさにあまりにけりなおほあらきの もりのしつくの焔のしら露

題をさくり侍しに、沢辺女郎花 をよめる

おもかけをのこしてみはや女郎花 野沢の水の花のかゝみに
ひとかたになひきもはてす花すゝき ふきもさためぬ焔の野風に
草のはらなひくかたより吹そめて おはなにつたふ焔のゆふかせ
山のはのあくるけしきはみえわけて おはなにしらむむさし野の原
心をはみやこにとめてはつ焔の 月にやこえむあふさかの関^{37ウ}
ふもとにはかけさしこゆる山のはの とをきかたより月やみゆらん
あしひきの山のあなたも山よりや くるゝ夜ことの月はまつらん
みれははや雲ゐにたかくすみいてゝ さ夜なかしるき月のかけかな
いつくにか心のはてもなりぬらん 雲ゐはるけくすめる月かな
白露のたまをひかりにしきそへて 空よりきよき月のかけかな
かくしてもくもるならひはしられけり 涙のこさぬ焔の夜の月

あなし山ひはらかおくのたかねより まきハ葉^{本ノマ}わけていつる月かけ
明石かた浦ものこさすさすしほに かけもみちくる焔の夜の月^{38ウ}
雲もなきすまの浪ちのゆふなきに ふねをうかめて月やたまし
ひくしほのみきはやとをくなるみかた まさこもしろき月のかけかな
しろたへのまさこにおふる松かけの きよきなきさにすめる月かな
はる／＼とおもひやるにもくまそなき あしやかおきの焔の夜の月
みつしほのさすにまかせてみなとより いなさほそ江をのほる月かけ
わたのはらやへのしほちの浪のうへに こきいてゝみる月のさやけさ
正応四年八月十五夜、將軍家御 会のときよめる

こよひそと月もそらにやまちつらん なへてならすもすめるかけかな^{39ウ}
都にはこよひそいつるあふさかの せきひきこゆるもち月の駒
あかなくなかしとたにもおもはれす 月にわするゝ焔の夜のそら
東にもおなし雲ゐのかけなれは 月にみやこのことやとはまし
草のはら野もせの霧のはるゝ夜に とを山みえてすめる月かけ
くるゝ夜のみねのあらしやさそふらん 雲になかるゝ山のはの月
中納言為世卿十首哥よみ侍し とき

ふきしほる松のあらしをわけすてゝ しくれをのほる山のはの月
すみのこる人こそなけれふるさとの 焔はむかしのあさちふの月^{40ウ}
いそあまりつもれは老のわか袖に なれてひさしき焔の夜の月
いにしへのそてのほかなる墨染の またなれかはる焔の夜の月
老。か身のかはかぬそてをしたひきて 涙になるゝ月のかけかな

久かたの月のかつらのいろよりそ 𦵏にはあへぬもみちをもみる

吹すてゝ雲はなこりもなきそらの 風（黄）にそやとる𦵏の夜の月 門田の月に𦵏かせそふく

まはらなる山田のいほのひたすらに 月もともとやもりあかすらん
をく露もいにはあまるあさあけに ほなみもしつむ秋の小山田41ウ

ゆふしものおくてのいなは風たちて 入日もさむき𦵏のをやま田
ねさめしてふけたる夜半の𦵏風に たかさとならん衣うつなり

風の音もゆふへさひしき松かけの さふくいほに衣うつなり
さ夜（黄）ふかき難波のこやの月かけに 蘆の葉かくれころもうつなり

たかりのねさめとまではしらねとも あかしのかたに衣うつなり
𦵏の田のあさ露さむみ我かとの いなおほせ鳥は今そ鳴なる

風さむきおのへの雲のたえまより ひとつらみえて鴈はきにけり
あまをふねはつかりかねの雲より 月もとわたる𦵏の浦かせ42ウ

人々続哥よみ侍しとき

たちまよふ雲をつはさにかけてすてゝ 風のうへとふ𦵏のかりかね
さむき夜の月をのこしてあかつきの あらしをわたる𦵏のかりかね

あさな／＼おるそてぬるゝ𦵏はきの 花野の露にしこそ鳴なる
をのかすむみやまをろしやさそふらん こゑをはよそに鹿そなくなる

妻こひはなくさめかたき𦵏そとや をはすて山に鹿のなくらん

中納言為世卿十首題中、野月といふ 事を

さそはれておなしみやまやいてつらん すそ野の月にしかそなくなる

中納言為世卿亭にて、哥よみ侍し に、曉鹿を

月のこるをのへのまつのこすゑより43ウ あらしにとをきさをしかのこゑ
吹こゆるみねのあらしやさそふらん 山のあなたのさをしかのこゑ

草のはら入日さひしき𦵏風に をかへのあさち鶉なくなり

あけやらぬ草の戸さしの𦵏の雨に ねさめのゝちも夜半そひさしき
夢さむる夜半のあらしにさきたちて 軒はをすくる秋のむらさめ

小倉山またきもみちのしたそめに あを葉露けき𦵏の村雨

霧のまのゆふ日にみえてかたをかの おはなにましろはしのもみちは
心こそみれはひかるれあつさゆみ はしのたち枝の𦵏のもみちは

鴈なきてうつろひそむるかた岡の はしのたちえに𦵏風そふく44ウ
さはやまのはゝそのこすゑ露をきて 風にはれゆく𦵏の河霧

軒はよりほかにやつたの色を見む 松のしくれのこのまもらすは
草の名のおもひありとそしられける おはなかもとの松むしのこゑ

夜もすからきけは露けき虫のねに 手枕したふ𦵏の月かけ

老か世の涙かはしてきりきりす たまくらちかくなかぬよもなし
よな／＼はうらみよはりてねをそなく わかおもひをやむしのなくらん

宇都宮社の九月九日まつりの時 よみ侍

けふことに神もいくよとちきるらん なをなかつきの𦵏のしら菊45ウ

初しくれ色とる木々もあらはれて ゑしまか𦵏のもみちをそみる

𦵏の色もまたふかゝらぬもみ葉の うすくれなるにふるしくれかな

神なひのもりのたむけやいそくらん はやくそ𦵏はもみちしてける

そめするみねのしぐれの雲間より 入日にうつる焔のもみち葉
うすくこくいかにくれてそめつらむ おなしみやまの焔のもみち葉
かしは木のもりてしくれやそめつらむ 色つきのこるもとつはもなし
たかまとおのおへのみやのゆふしくれ 山もたけてふらぬ日もなし
けふも又ゆふ日になりぬなかつきの うつりとまらぬ焔のもみちは^{46ウ}
うつりくる焔のなこりのかぎりたに 夕日にのこるみねのもみちは
をくら山このはしくれてゆく焔の あらしのうへのこる月かけ
浅茅原うらかれそめてなかつきの すすの露そ霜になり行

冬

色まさるまさぎのかつら里かけて とやましくるゝ神無月かな
いつもふるしくれも冬のものならば 袖のみたえぬ神な月かな
ふみわけぬこのはのうへに音たてゝ あらしそわたる山のかけはし
吹程はあらしのうへにみたれつゝ^{47ウ} ふらぬしくれもこの葉なりけり
をしなへてちるもみちはの一さかり あらしそ山の松をそめける
しくれこそよそにすぎぬれ神な月 風のすなるそらのうき雲
雪となりしくれとなりてうき雲の ふりもさためぬ神な月かな
はれまともおもひはつへきしくれかは また雲さそふ冬の山かせ
あらし吹みねのもみちの木すゑより ちりかひくもりふるしくれかな
みなかみのにしきを色にぬきとめて このはにそむる滝の白糸
ねさめするまぎのいたやを吹風の よはれはよはる村しくれかな

空もなをさためあればそ神な月 しくれは時のあめとふるらん^{48ウ}
朝またきとをつたかねの木すゑより 松にくもりてふるしくれかな
けふもなをあさる雲のはれすのみ とをつたかねにふるしくれかな
あさ日さすそなたはかりは露おちて 軒はにこほる竹のはつ霜
たにふかきまぎの下草をとすなり はらはぬ風や霜にふくらん
冬くれはなかれてつもるあしろぎの もみちにせける宇治の河水
霜かれのすそ野のまし葉こりつみて 山もとくたる冬の河舟
はらの池の蘆まの水すきかてに なをとひめくるかもむらとり
ふけにけり霜のよわたる月かけの 木すゑにかゝるかさゝきはし^{49ウ}
夜の程の雪かとみゆるのきはかな まぎのやしろき今朝のあさ霜
さは河のいはまの浪そむせふなる さゝれの氷夜半にすみしも
冬さむみかよはの水の名をとめて こほりにしるき音なしの滝
今朝までは岩まつたひになかれつる 山水はゆふこほりせり
杣河のこほりに水やよとむらん くだすいかたにつなてひく也
さゝなみのをとをは松にふきかへて こほりをわたるしかの浦かせ
かみやまのしめしはかくれ消やらて 霜のゆふしてかけぬ日そなき
ひさきおふる河辺の霜のさ夜ふけて きよきなきさに千鳥鳴なり^{50ウ}
ゆふされはしほみちのこる浪まより みゆるこしまになく千鳥かな
なみちには跡もさためすとひむれて いそへにかへる友ちとりかな
人々題をさくり侍しに、海辺千鳥を
むら千鳥はねをならへてあらいその くだくるなみのうへに鳴なり

夕されはなきたる浦のなみちより 千鳥とわたるおきのとをしま
ゆふされはなみこすいその村ちとり 月のてしほのそらになくなり
をのがあるはかせをさむみあしかもの さはく入江やまつこほるらん
夜の程の雪ともけさはいふはかり あさちにあまる庭のしもかな^{51ウ}
夜をさむみとをちの池やこほるらん あらしのすゑにかもそ鳴なる
ふゆかれのあしまの水にぬるかも うはけもしろき霜の明ほの
朝ほらけ入江にうかふ水とりの あを葉すなくふれる霜かな
けさの色はあをしともみす難波江や 蘆まのかもの霜のふりは
みやまには雲より雪のかつちりて あられにいそく野ちのたひ人

千首の続哥よみ侍し時

風わたる軒はの山のかしは木に たゝひとゝをりふるあられかな

平宣時朝臣亭にて、さくり 題よみ侍しに

山たかきいほの軒はは風はやみ^{52ウ} 雲もとまらてふるあられかな
夢さむるみやまをろしのさそひきて みねの雲よりふるあられかな
風のをともさらにさひしき冬かれの ならのはしはに蔽ふるなり
かしは木にあらしの音と聞なせは ちらぬかれはにあられふるなり
水くきのをかのむらしは音たてゝ ねてのあさけにふるあられかな
中納言為世卿亭にて、人々哥 よみ侍しに、雨後雪といふことを
くるゝよりおのへのしろくみゆるかな 今朝のしくれは雪けなりけり
はつせ山おのへの雪け雲はれて あらしにちかき暁のかね
風さゆるみをのすさきのあさあけに^{53ウ} 松原しろくふれる初雪

夜の程の庭のはつ雪ぎえぬまに 今朝は我こそ友をまちけれ
ふみわけてたつぬる人はなけれとも はつ雪ふりぬ三輪の山もと
山風のおもはぬかたに吹なして 庭にすくなくふれる雪かな

平貞時朝臣、三嶋社十首うた 人々よみ侍し時、松雪を

うつもれぬかたえの雪にあらはれて あらしの跡そ松にみえける
さむき日の雲をたかねに吹ませて あらしよりふく山のしら雪
峯つゝきあらしはるかに空はれて くもにこもらぬふしの白雪
くもる日のあらしは空にさえすきて^{54ウ} はらはぬ雪の松につもれる
いけ水のこほらぬ程はあしかもの うはけにみえてふれるしら雪
うちわたすをちかたしろし朝ほらけ そのまのこよひふれる雪かも
神まつるころにはあらぬさかきはに ゆふしてかけてふれるしら雪
山ふかきゆきにそこはみえねとも やとありけりとたつけふりかな
杉の葉のこすゑの雪をふきすてゝ しろしかくさぬ三輪の山風
雪になをさきたつ跡もたえぬへし 山こえつゝけ冬のたひ人
今朝みれば軒はの竹は跡もなし あらぬまかきとつものしら雪
ふきこほるこすゑの雪にかけみえて 風さゆるよの山のはの月^{55ウ}
あらし吹こしのたかねの雪まより 木すゑの雪にのこる月かけ
かり人のたもとはらふしら雪の ふるのゝたち目もくれにけり
松のをとはつもらぬ程そきこえける 木すゑひとつにふれる雪かな
うつもれぬ色ものこらすこしの山 木すゑも雪のそこになりつゝ
はれやらぬ雪けとみえてすみかまの けふりにくもるおほはらの里

をのつから雲にましらぬけふりかな 雪のはれまのをのゝすみかま
とゝまらてすくるならひとおもひしに 月日よりこそ年はくれけれ
わかよはひいそちあまりのゝちよりは いそぎならはぬとしのくれかな
いにしへにかはるともみぬ月日たに 老にははやきとしのくれかな

56-
ウ

出家し侍し時、歳暮をよめる

いそかれし春はむかしに成はてゝ 雪ものとけきとしのくれかな
老か世はしきりになみもこゆるきの いそかれぬ身にくるゝとしかな
われをわくならひをとしにしらせはや もれぬなせけそ身にはよしなき
ことしいまくれはむそちのさかこえて くだりさまなる身のよはひかな

(三行分余白)

恋

なにゆへとおもひもわかぬなみたかな あやしやそでのぬれはしめつゝ
おちそむる涙はなにのしるへして おもふこゝろのさきにたつらん

57-
ウ

將軍家人々十首題よみ侍し 時、初恋

中。くにしらせそめてもいかゝせむ さてしもおなし心ならずは
いひやするいはてやあるとおもふこそ 思ふこゝろのはしめなりけれ
わか恋の山ちにさかはこえねとも まつくるしくそおもひ入ぬる
せきわひぬそでの涙のたまかしは もにうつもるゝこゝろならねは
なみのうついはねはこそいそかくれ あまのしのひにこかれわひつゝ
津のくにの名にはたてしと夕煙 あまのしのひにしたむせひつゝ
もらさしと忍ふなみたのたまかつら 人めくるしきとしもへにけり

58-
ウ

あらはれてほにこそいてねしのすゝき した葉の露はをかぬよまなし
しはしたゝ人めもるなとしのふかな つらきにおしむ涙ならねは
なにとしてそでのほかにはもりぬらん 涙そものをしのはさりける

幼 恋

な。にことをおもふとたにもいはぬ身に いかにをちつる袖の涙そ

忍 恋

あはれとはいははゝやあらむたかための 涙ともなくぬるゝそてかな
いつまてかなを年月のしのはれん 心なかきも涙なりけり

59-
ウ

ふしのねのむなし煙はなもつらし けたぬおもひのすゑをしらねは
せきかぬる涙も今はあらはれて をとなしならぬ袖のたきかな
たえてなをおもふまでこそ忍つれ 涙ゆるしてぬるゝそてかな

いつまてか人めくるしき年もへむ 心のうちのたきのしらいと
わか中はとを山とりのねをすかゝみ おもかけはかりよそこにこひつゝ

おもかけはとを山とりのねをそなく はつおのかゝみみぬよかさねて
つらきにもおもひもこりす□恋は わかつれなさになりぬへきかな
なをさりのつらさはかりとおもひしに なをつれなくもなりまさるかな

60-
ウ

続哥よみ侍しに、忍尋縁恋

人つてのたよりたつねてこゝろみむ しはしは我といひもいたさて
さきのよのむくひまでこそおもひしれ つれなくつらき人に恋つゝ
せきかぬる袖のとかとはおもふなよ つらき人こそ涙なりけれ
あふことはさこそなきさにひくあみの ひとめなりともみるよしもかな

つれもなき人の心にたとへてそ 松のしくれは涙なりける
我袖の涙そとしはふりぬへき つらきかきりをいつとしらねは

平貞時朝臣三嶋の十首哥 人々よみ侍し時、晚風催恋と いふこと

を^{61ウ}ふけとたにまたぬゆふへにかなしきは わかためつらき人の秋風
たのむれはまたすはさすかあらねとも いさとそおもふ夕ぐれのそら

まことなきつらさをいつもならふ身に たかことのはのなをまたるらん
こぬ人をまたしとおもふころさへ いつはりになる夕ぐれの空
目をかさねころさむとの夕ぐれを しらすかほにてなをやまたまし

心からまことならすはゆふくれを たのむよりこそ袖はぬれけれ
をのれさへこぬにならひてほととぎす 人もつれなきゆふくれのそら

さりとともちきりまたるゝゆふくれも 程のへぬれは我やゆかまし^{62ウ}
いたつらにまのともし火ふくる夜に われをそむけてくる人もなし

くる人をいかゝいとはむさねかつら たえずはすゑもあふさかのせき
あふまてのつらさはかりと思ひしに またいひしらぬ鳥のこゑかな

あけたてはねこそなかるれせみののは ひとへにつらき袖のわかれに
あふさかの名につけてこそうらみつれ ほかにしるべきとりのこゑかは

うかりつる鳥のなくねにかへるさの われなくさむる有明のかけ
とけそめてのちもつらさのあるよかな あかつきむすふ君かしたおひ

中／＼にうしとたにこそいひしらね 袖のわかれのしのゝめの月^{63ウ}
さらに又おもふころもきえねとや あしたの霜のおきて行らん

さりとともたのむこよひの契たに またるゝよりは程そへにける
あふことにかへていのちをなにかせん おなし世にこそいひもかはさめ
ひとりねはちきりへたてゝ山鳥の をろかなるへきなかそしらるゝ
ひとゝせにふた夜ともなきたなはたの あふせうらやむわか契りかな
みるめこそなきさにいまたおひさらめ 涙はうみと年つもりつゝ

侍従中納言為世卿関東下向の時、 今宮の十首哥合のとき

なをちぎれのちせの山のををつゝら たえぬもなかはすゑそくるしき^{64ウ}
身をしれはうらむるまてはなけれとも 心ひとつにぬるゝそてかな
うき名のみあたちのまゆみ我かたに ひかぬころをなをうらみつゝ
うけひかぬ人のつらさをしらま弓 心よはくそうらみなりぬる

互恨恋

吹つよるうらみはたれかまさるらん こなたかなたのくすのうらかせ
題をさくり侍しに、秋恨恋

物おもふやとの軒はのまくすはら 心にゝたる秋かせそふく
たか秋のそてにならひてうらむらん ゆふくれことのくすの下かせ

人かすにおもはれぬへきわれならは うらむとたにもいひてみなまし^{65ウ}
身のとかとおもひなせとも人しれぬ 心の秋はくすのうらかせ

くるしきも心なくやおもはまし しはししのたのりのしめなは
あふまてといのるしのかひありて ちかひあらはせ三輪の神すき

みてさめし契を人のかきりにて 夢はうつゝのつらさなりけり
あふことは夢にたにこそたえにけれ ねられぬ恋のせめてつらさは

題をさくり侍しに、夢中契恋

うらみはやゆめのうつゝのかねことも 一つはりになる夜半のねさめを
あらはなるかけをはいとふなみたとも しらてやそてに月はすむらん
中／＼にまたしやこよひ月にたに^{66ウ} こさりし中に雪はふりつゝ

そのまゝにかはらぬ月となかめても うときにしほる夜半の衣手
わかそての涙やいろの見えぬらん しのふもしらぬ月のかけかな

宮にて、八月十五夜月見侍し 又のとしの同夜月哥よみ侍 しに
こよひこそ人のためとは月をみれ 心やおなしそらにかよふと

いつまでかうきためしにはおもひけん のこるかたみも有明の月
あはてふるこひのみたれのつかねをに わかゝたいとなるよしもかな
なつひきのこやのしつはたいとせめて こひしきときそおもひみたるゝ

統哥よみ侍しに、逢恨恋の こゝろを

こしかたはいひて甲斐なきつらさに こよひは人にまつうらみつゝ

鎌倉前二品親王家にて十首 題給侍しに、逢恋といふ事を

いかなりしつらさにかへておもひけむ あひみるまゝにおしきいのちを^{67ウ}
あさからぬこゝろのうちとしらせはや かはるせもなきなか河の水

来不留恋

ひきとめぬあみのうけなはくるしくも そてにかけてはかへる浪かな
ふみたゆるあとをむかしになしかへて さとをはかれぬみちをしらはや
いつよりかつらきこゝろもつきくさの^{68ウ} 花いろ衣うつりそめけん
よそにのみうつろふ色のはなこゝろ へたつるなかにたつかすみかな

ことの葉そまつ色かはるあた人の うつる心の焔のしくれに^{1(黄)}

いかなれば人のこゝろのわすれみつ かよひたえても袖ぬらすらん
うつりゆく人はのきはのわすれくさ たかこゝろよりたねをまきけむ

さくり題よみ侍しに、近恋と いふことを

うきふしのつらさもしらぬ葦垣の ちかきへたてはこゝろなりけり

さてのみやへたてもはてむあま雲の よそなるなかのはれぬつらさは
かつらきやみねにたゝふあま雲の よそにみてたに袖ぬらせとや

おくふかくおもひこそやれこひのやま^{69ウ} まよふみちにも人やあふとて

いかにせむいまこそ人のたのむとも いな葉の山のまつにとはすは

あらはれてつらかるへくはなとり河 かくろへはてよせゝのむもれ木
袖ぬるゝうき世のなみのよる／＼は 人をいさよへうちのあしろ木

たのまれぬ人のうき世はとたえして あさかりけりな中河の水

わかなみたせかてなかれはよし野河 たきつこゝろにおとりやはせん

題をさくり侍しに、忍通書恋を

なをも又心つくしのはてそなき ゆるすはかりのもしのせきもり

わか袖にうかみやいてむおほふねの ゆたに涙のうみとなりなは

ひとすちになひく煙のそのまゝに ことうら風のふかぬ日もなし^{70ウ}

いつをそのつらきはてともまつらかた 心つくしのかぎりな的身や

わか袖になとかみるめのおひざらん 涙はふかき海となれとも

しほみてはそてのみなとのかたをなみ ひとときしらぬわか涙かな

あつまのみちにて、人につかはし ける

かりそめとおもひしものを草枕 心にかゝるそでの露かな

おなし時によめる

わかゝたになひくならひをしらせはや ふしの煙におもひよそへて
おもふともしたにむせはむ夕煙 わか身あさまの名にもこそたて

人／＼哥よみ侍しに、寄虫恋

きり／＼すわかおもひにやかよふらん うらみよりはりてなかぬ夜そなき
ことのはもうつろひそむるはつしくれ わか身を侘の名こそふりぬれ
いける身のあるにまかせてふるほとに つらき涙もとしはへにけり

(二行分余白)

雑

(一行分余白)

浦風のゆふなきしるくすまのあまの たくもの煙空そのとけき
みなと山なみちはなれぬよこ雲に うかみいてたるあまのつり舟
みつしほのかへる浪にやなかるらん 入江をいつるあまのすてふね
みつしほに入ぬるいそのあらはれて すさきにかへるあまのむらつる
ゆきよらぬはま名の橋はみえわかつて 松のこのまをわたるかち人
みれは今おきにそたてするみつしほに 入ぬるいそのみつのはま松
すみたえてなをきゝなれはいかならん まつかなしきはみねの松かせ
すみなるゝ身にたにかなし今さらに きく人いかにみねのまつかせ
山里の竹のあみかきうきふしの しけきよにのみたえてすむかな
のきめくる竹のあみとの身つからも すみたえぬへき山のおくかは

はれのこるとやまのみねのあま雲を つはさにかけてわたるかきゝき

夜もすから雲をはよそに吹すてゝ あらしにあくるしのゝめのそら

おきいてゝ空はみねともかねをとに ^{本ノマ} はれたる程のあかつきそしる

ほの／＼と木すゑを雲のうへにみて みねの松よりあくるしのゝめ

みねはそらふもとは雲になりはてゝ 名よりもたかきふしのしは山

せきの戸のあくるもまたであふさかの ゆふつけ鳥のなにとなくらん

けふもなをゆけはさすかにむさしのゝ おはなかつゑに山そちかつく

たちならふこそゑもみえすあはつ野の ひとつかしはの名こそしるけれ

ふかゝらぬ水にあさかのぬまそとは かつみるからに名こそかくれぬ

いつよりの名になかるらんしかま川 よもの水のみ海にいつるを

袖ぬるゝうきせなりともすゝか河 ふりすてかたきせをはうらみし

かきねには露をのこしてむらさめの 名にふりぬるか玉河のさと

晩 ^{本ノマ} あまへくたらむとし侍しに、 中納言為兼卿のもとより

いかゝせむまたみやこなるけふたにも かねてなこりのしのひかたきを

返し

なをさりの心ならねはなこりとも よのつねにこそいはれさりけれ

中納言為世卿京よりかゝみの宿へ をくられ侍し

たちかへりなるゝをあたにおもふこそ せめてなこりのあまりなりけれ

ことの葉になけくとはみよかゝみ山 したふこゝろに影はなくとも

返し

心より今はくやしきなこりかな いかにおもひてなれはしめけむ

い(右黄) 君にこそうつしとゝむれかゝみ山 したふこゝろも影となれとて

権中納言為兼卿永仁元年歳暮之比、 関東に下向侍しに、 世上事

悦ありて帰洛侍し時、 道より申 送られ侍

としくれし雪を霞にわけかえて みやこのはるにたちかへりぬる

返し

雪ふりて年くれはてしあつまのに みちあるはるの跡はみえけん^{76ウ}

御代のはるの霞もみちのしるへとや みやこのとかにたちかへるらん

宮にておもひもいてむ人もかな わか身あつまのおなし心に

なきをくるゆふつけ鳥もとたえして あかつきふかきあふさかの山

なきつゝくゆふつけとりもなかりけり さとゝをき野のあかつきのそら

あけやらぬ鳥のそらねに駒とめて しはし夜をまつうつの山もと

せきこゆるあととみやこのあかつきに 鳥のねすこきあふさかの山

あつまちにまたゝちかへるたひころも きてもとまらぬ日かすをやへん

このたひはゆふつけ鳥に契らはや またあふさかの名をのこせとて^{77ウ}

くりかへしたあつまちをいつかみむ 身こそおいそのもりのしめなは

たひのそら雲さに山はあらはれて あめはれそむる野ちのをちかた

草枕かりねのやとの夢をたに むすはぬ程にあらし吹なり

いかにせむゆふこえくれぬおほえやま すゑもいく野にやとりなくして

かゝらすはこえてすくへき山したの いはもる水に松かせそふく

ふもとまでまつゆきよらむきそち山 こまをやすめてみさかこゆへく

下野にて、題をさくりてよみ 侍し

秋風にうつる日かすもなかりけり わかさとちかき白河のせき^{78ウ}

中納言為兼卿もとより申送侍

つねよりもおもひそいつるこのゆふへ 君もこゝろやもしかよふらん

返し

おもかけはさそ身をさらすなりぬらん 心をやらぬ時しなけれは

中納言為世卿、將軍家平貞時 朝臣旁和調師範定侍し時、 千首続

哥よみ侍しに、 浦といふ題をとりて

桃千(黄)

この春そあつまに名をはのこしける 四代のととむ和哥浦風

賀茂祭見はへりて、 あつまに くだり侍てのちのとしの卯月 のは^{79ウ}

しめつかた、 題をさくり侍 しに、 あふひを

今よりそこゝろにかゝるあふひくさこそはみあれのかものかみかき

くもりなくはれたるよひの大そらに とわたるほしのいちはやのよや

すなほなる跡をたつねて夏草の ことしけからぬみちをしらはや

侍従中納言為世卿、鎌倉に下向 のとき、 十首題人々によませ 侍

しに、 寄月述懐といふ事を

しるへするひかりなければ秋の月 よにいておとる身をもうらみす

霜かれの野かみのかたにきこゆ也 あくるあらしの暁のかね

有明の月にいつよりならひきて つれなくのこるよにめくるらん^{80ウ}

いにしへはあかつきとてもみし夢の などこのころはとをさかるらん

いつまてと老のあはれのあらましに 涙のものとなれる袖かな

將軍家にて、題をさくられ侍しに、三品親王家の御時思出られ

侍て、述懐といふ事を

うれしきに老のそてをそぬらしつる 本ノマ、 みしかへる和かのうらなみ

為相朝臣、日吉の十首よみ侍しに、同心を

行すゑのゆかしさもなき我身かな わかゝりしよはまたれしかとも
むそちまてなりもならずもいまはわか としこそ身にはおふの敵のうらなし

つもとるも身にはおもはぬ年月の むそちにちかくなりけるかな 81ウ

吉田の禅尼、八旬に満し侍し春、鳩の杖をつくり侍しに

ハ、黄、 この杖をなてにつきてももとせに ふたうちあまる老のさかゆけ
しのふよのむかしにかへるゆめたにも おもふまゝにはみる夜半もなし

喜撰を

むかしそのよをうち山のしかはかり なをあとのごすねをやなくらん
かねのをとにくるゝ日かすも飛鳥の あすかけふともしらてすくせる
けふのひもはやくれはてぬあけは猶 あすかのてらのかかつきのかね
世中にさてもうつゝのあらはこそ 82ウ なにをゆめはみせもしらせめ
よの中のうつゝをいかにたつねまし まとろめはこそ夢とみゆらめ

他力本願の心を

たよりあるにしのうらふねさしうけて をしふるのりの風にまかせん
ふみまよふみちもわれとはありぬへし をしふるのりの跡をたのまむ
南無阿弥陀仏の御名をたねとして 心のはなのさとひひらけん
あみたふとなへてたのむみのりにも 心はひとつをしへなりけり

禅心を

すみまざる月きよければ秋風に さてもとまらぬ空のうき雲 83ウ
うたかはぬのりのをしへにかたふけは 心もにしに有明の月

いける身になとかうつゝのなかるらん わかよのゝちやゆめもさむへき

こきよするたよりならてはわたし舟 のりうけかたき我身なりけり
神かきのつるのをかへのみしめなは 君かよなきためしにそひく

見すしらぬそのかみ山のたまつはき ふたゝひ千世のかけやへぬらん

あきらけき国のまもりと跡たれて 日吉の神や世をてらすらん

くりかへし神にそいのるみしめなは なかきちかひによをまもれとて
たのむそよしめいふ神のみたらしや わかなかれをばくみもわすれし 84ウ

にしの海のおきつ白浪をとたえて のとかにあれやわか君の御代

くもりなくすむへきかけのしるへして 月にそちぎる千世の秋風

君ませはさかのゝみちもふみたえす 千世の跡こそ猶のこりけれ

君か代にさてもやたちもならふとて またおひかはれたかさこの松

二条前相公雅有卿夢想の事 ありて、四方月よりはしめて 月の百

首をすゝめられ侍し 時よめる

(二分余白)

東 月

あしからの関のこなたに秋をへて あつまの月はなれてこそみれ 85ウ

西 月

入山のみねのこのまにかけみえて 松のあなたに月そのこれる

南 月

はしちかきこすのひまより月みえて みなみすゝしき夜半の秋風

北 月

ふけにけりまとよりきたのくれ竹に 軒はさしこす秋の月かけ
ゆふくれに影さへうすくいてそめて 雲にまぎるゝ秋の夜の月
山のはの木すゑのうへにあらはれて たかくもいてぬゆふつくよかな
ゆふくれのそらにはまたきいてやらて 雲にうつろふ山のはの月
山のはにやかてほのめくひかりかな くるゝそらをや月もまちけむ⁸⁶
あきあき月のかつらのうすもみち そめぬかけさへ色に見えつゝ
そらにてそかけはすくなき山のはに ふさかりいつる秋の月
ゆふくれもおきのは風もそれながら 月こそ秋のあはれなりけれ
はれぬよもくもにひかりのうつろひて ゆくほとみゆる秋の月かけ
つく／＼とみれば心をつくすかな このまの月の影ならねとも
ふきはれぬあらしにしはしやとりきて くもよりいつる秋の夜の月
いさよひの月みる夜半のまきのとを あやなくたつる山をろしの風
かたふかぬ月さへかけのはやきかな むら雲ちかふ秋のよのそら⁸⁷
あなし山ひはらかおくのたかねより まきのはわけていつる月かけ
いかにしてななきねさめをなくさむ 月てふものゝ夜半にすまはす
ものことにふけしつまれるけしきかな 月はねまちそすみまさりける
まきの戸もさゝてさなからふくる夜の 月にいさよふ秋の山かせ
行雲はなこりたになき月かけに しくれをのこすみねの松風

吹すてゝのこれる雲もなきそらの あらしのうへにすめる月かけ
なかむとてぬる夜をよそになしはてゝ 枕わするゝあきの月かけ
こよひそとまつに心のいそかれて いつるもをそき山のはの月⁸⁸
たくひなきひかりもかけもこよひとて 空になたかくすめる月かな
庭の池のそのまさこにやとるまで すみとをりたる月のかけかな
をきかふる花の千くさの露ことに 月もあまたのかけそうつろふ
草のはら野もせの夜はの霧はれて 月もたましく秋のしら露
何事を月にいかにとうらむらん 心もしらぬくすの秋かせ
そらきよきかけものとかにすみなりて 月もあはれはふけてこそしれ
風さはくそらは野分のけしきにて 雲にうきたる山のはの月
てりまさるかけはなへての秋なれば くもるも月のあはれとそみる⁸⁹
いにしへの月にねられぬ秋よりや をきあめさとの名をはしめけん
もしきやおなし雲ゑにすみなれて 月のみやこのくもるよそなき
衣うつゆつのはむらに月ふけて 河かみさむき山の秋かせ
水のうへにうかへる月のみふねさす さほの河風雲ものこさす
松にふくよさのしほ風さよふけて 月すみわたるあまのはしたて
わかやとはすきの葉しけし三輪の山 いかに待みむ夜半の月かけ
あらし山ふもとをにかけてはるゝ夜の 河せはるかにすめる月かけ
みなかみのかけをやなかすしかま川 海にいてゝそ月はすみける⁹⁰
もかみ河月さしのほるいなふねの いなにもあらぬ夜半のかけかな
浦風にもしほの煙すゑきて そらにくもらぬ秋の月影

山のはもとをきなみちはみえわかつて 海よりいつる秋の夜の月
わたのはらみとりの空もひとつにて うつしてすめる秋のよの月
浪のうへに松はらみえて清見かた むをのすさきにすめる月かけ
さすしほの入江のあしはしけゝれと 月のみふねはさはらさりけり
ひくしほのひかたやとをく鳴見かた まさこにしろき月のかけかな
ふけゆけはもしほの煙そらはれて 月もくまなくすまのうら風^{91ウ}
あらいそのいはこす浪にてる月の ひかりをくたく秋の浦風
よこ雲にぬなのしは山あけそめて みなとにのこるしのゝめの月
なみあるゝゆふしほあひに月みえて 雲ふきのほる秋のうらかせ
夜もすからはらひもやらぬ嵐かな 月よりふれる松のしら雪
雪にみえしたをれのこる色もあらし 月なれはこそ軒のくれ竹
さためなくしくれてはるゝひまゝの 雲にいて入夜はの月かけ
いくほともふらぬしくれと思ふまに にしまて月のふけにけるかな
いてやらて山のはなからふけにけり しくれする夜の秋の月かけ^{92ウ}
あかすみてあくるなこりのおしければ 月にもつらき鳥のこゑかな
雨はれてよとのさは水すめるよは つねよりことに月のさやけき
すみかへる程ははるかなにcateてむ いてつる山に月のいりせはし
すみわたるかけはとたえもなかりけり 月はむかしのまゝのつきはし
色ふかき軒のもみちのこのまより 月もしたてる秋の山さと
をやまたにひかぬなるこもとたてゝ いほもる月に秋風そふく
かたをかのはなかなすゑのとをきのに 霧のひまより残る月かけ

入ぬとやみねのあなたはおしむらん こなたにいつる山のはの月^{93ウ}
すみのこる人こそなけれふるさとの 秋はむかしのあさちふの月
いたまより軒もる月もいにしへを しのふにくもる秋のふるさと
くもりなきかけにやよるもさらすらん 月にはしろきぬのひきのたき
秋ふかみ露をくそてにてる月の かけすさましき夜半の風かな
かきたむるもくつなれとも玉津嶋 月にそよするわかぬ浦なみ
こしかたも猶行すゑのあらましも おもひのこさぬななきよの月
くもるをはつらきかけともしらねはや 涙を月のなをさそふらん
行かたに今いく秋のゝこるらん むそちゝかくそ月になれぬる^{94ウ}
涙ゆへ老のそてにはくもるそと 身のとかにしる秋の夜の月
わりなしな老のそてをもしたひきて 涙いとはぬ秋の夜の月
わか身かくありかたつぬる山のはに なをすみうくや月はいつらん
世のなかになをすみのこるつれなさや わか身たくひの有明の月
くもると袖の涙にやとらすは わか身をいとへ秋の夜の月
むへしこそつもれは老となりにけれ 月をめてつるとしをかさねて
身のほかになかめゝてとしもへぬ。よにすみいつる山のはの月
ものことになれぬたひねにかはらねは 月そみやこのかたみなりける^{95ウ}
月すまはよるこそこえめうつ山 をかへの里に日はくれにけり
おもひでのだひねとてこそ東路や はまなのはしの月はみてしか
入海のはまなのはしの松はらに 月かたふきぬあけぬこの夜は
い(右黄)前後
こえかゝる山ちの月のいらぬまに さとまでゆかむ夜はふけぬとも

八(黄玉葉)

みやこにてまたれしみねをこえきても　なを山よりそ月はいてける
なみちより松にふきこす風のをとも　たかしの山にのこる月かけ
しきりつるゆふつけ鳥も鳴たえて　しはし夜ふかきみやまの月
いにしへの袖よりなれてすみそめに　うつりわすれすやとる月影^{96ウ}
つれもなくよにすみたえて有明の　月やうき身のかゝみなるらん
風わたる露のやとりの夜半の月　すみもとまらぬよとはしらすや
月もまたうきよになれてくもるらん　人のあはれにたえぬけふりは
うたかはぬのりのをしへにかたふけは　心もにしに有明の月

やはらくる光もいくよちきるらむ　ふるき宮ゐの栂の夜の月

すみの江の松のひゝきも神さひて　あらし夜ふかき浦の月かけ

すゝきつる栂をはあきとことしより　月も干とせやすみはしむらん

くもりなくのとけき影をしるへにて　月におさまるみよの栂風^{97ウ}

君すめはみよてる月ものとかにて　風おさまれるかまぐらのさと

君まもるつるのをかへの神かきに　よろつ代かけよ月のしらゆふ

(四行分余白)

(半葉余白)

98
ウ